

MRI 検査における造影剤投与に関する説明書

今回のMRI検査において、造影剤という検査薬を使用する予定です。この検査薬を使用する予定の方には、「造影剤の投与に関する同意」を頂いております。以下の説明をお読みになった後に、ご不明な点を主治医に質問し、納得されましたら同意書に署名をしてください。

同意は強制するものではありません。造影剤投与に同意されなくても、病院側から不当な扱いを受けたり、何らかの不利益をこうむることはありません。ただし、可能性として、造影をしないことで造影をすれば判る病変が判らないという可能性がありますことをご承知おきください。

【 造影剤とは？ 】

ガドリニウム造影剤という薬剤を使用します。通常、静脈より投与し、注射後約6時間で80%以上が腎臓から尿として排泄されます。

【 なぜ造影剤を使用するのか？ 】

造影剤を使用すると「臓器と血管」や「病変と非病変部」のコントラスト（フィルム上での色合いの差）が増強します。これにより、造影剤を使用しない場合に比べ、個々の臓器や病変がより明瞭に判別できます。又、病気の種類によっては、造影剤を使用しないとその病変そのものが判らないこともあります。

【 造影剤は誰でも使用できるのか？ 】

以下の疾患の方は原則禁忌(使用できません)です。

- * 気管支喘息
- * 重篤な腎障害
- * 重篤な肝障害
- * 一般状態の極度に悪い患者

上記の他に、以下の方は慎重投与(診療上の有益性が危険性を上回る場合使用可)です。

* 本人、両親、兄弟に気管支喘息、発疹、蕁麻疹、アレルギー-性鼻炎などアレルギーを起こしやすい体質を有する患者

- * 妊婦（或いはその可能性のある婦人）
- * 薬剤過敏症の既往のある患者
- * 痙攣、てんかん、及びその素因のある患者
- * 授乳中（投与後24時間は授乳を避ける）
- * 幼、小児（安全性未確立）

【 造影剤の危険性は？（副作用 その他） 】

当院での造影剤の年間使用数は、平均 約 650 本 です。（1日平均 3人前後です）

造影剤の副作用は注入後すぐに（ほとんど5分以内）に症状が現れる即時型の副作用と、注入後、数時間～2日後くらいに現れる遅発性の副作用があります。

（ 即時型副作用 ）

1) 軽い副作用：吐き気、動悸、頭痛、かゆみ、発疹などです。一般には治療を要しません。約 1% の確率

(100人に1人程度)で起こります。

2) 重い副作用:呼吸困難、意識障害、血圧低下などです。一般に治療を要し、**後遺症が残る可能性**もあります。約 0.05% の確率(2000人に1人程度)で起こります。又、非常にまれ(100万人に1人程度)ですが、**死亡すること**もあります。

〈 遅発性副作用 〉

検査後、数時間～2日程の間に、からだがだるくなったり、頭痛、蕁麻疹などが出ることがあります。

(一般には治療を要しません)

〈 血管外漏出 〉

検査時は勢い良く造影剤を注入するために、血管外に薬剤が漏れる場合があります。この場合、注入部位が腫れて、痛みを伴う場合があります。一般には時間がたてば吸収されますが、漏れた量が非常に多い場合は、別の処置が必要になる場合もあります(非常にまれです)。